

---

# ウルフ族の紋章～出逢い～

糸香

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ウルフ族の紋章と出逢い

### 【Nコード】

N8588Y

### 【作者名】

糸香

### 【あらすじ】

昔から生き続けている妖怪。ウルフ族のミラルドが主人公。

ミラルドは戦闘の中で、愛する妻を亡くしてしまう。

それをきっかけに人を愛する事を辞めてしまった。

愛情からしか妖力を得る事が出来ないウルフ族にとってそれは、死を意味する事だった。

ミラルドの父エルドから授けられたペンダント（紋章）に蓄えられた妖力によって、子供の姿で生き長らえて来た。

あれから五百年の時を経て、一人の女性と出逢う。

ミラルドを仇と付け狙う者。守ろうとする者。慕う者。  
彼女の愛を手に入れる事が出来るのか。  
妖力を手にし、大人の姿に戻るのか。  
ミラルドの運命はいかに。  
時代を超えたラブストーリー。

く出逢いく（前書き）

文章力 低いですが、一生懸命書いてます。  
長いですがお付き合い下さいませ！

く 出逢い

人間が支配するよりも遙か昔から、あまたの妖怪が住み続けている。その中に誇り高きウルフ族は、いた。

彼らは樹海に住んでいた。めったに人間は入って来ない。住むには都合の良い場所だった。

ウルフ族は、本家側と分家側でその勢力を二分していた。昔から縄張り争いが絶えず。遂に五百年前、大規模な戦闘が勃発してしまつたのである。

分家からの使いの者がやって来た。『話し合いに応じる。一人で来られたし。こちらでも分家の代表一名で向かう』

彼は、争いが嫌いだった。何故いがみ合わなければならないのか。何故仲良く暮らし行けないのか。当主にもその想いをぶつけて来た。

だが、彼の言葉は受け入れられる事は無かった。

ミラルドは誰にも告げず、一人で出掛けた。その後を追う影には気付かなかった。それだけ思い詰めていたのかもしれない。

指定された場所に着いた。一人の男が待っていた。

「―分家の代表の者か―」

「そうだ…約束通り一人で来た様だな。感心、感心…。ミラルド様、争いを辞めにしたいそうだな。フン、愚かな。次期当主ともあろう者が…」

言い終わると同時に、左手を上げて合図を送る。分家の者達を取り囲んだ。

「…やはり罷だったか…」

「ミラルド様、あなたの提案には応じられない。―我々は争いを辞めない。今更攻撃の手を緩めたりしない。今我々は、黒樹様の力をお借りして、最大の力を手に入れた。今が本家に攻め入る最大のチャンスだ。…貴様には、ここで死んでもらう。」

攻撃の合図を送る。ミラルドは身構える。

「ミラルド様、お怪我は有りませんか」

「…ああ…済まない。勝手な行動を取って…助かった…」

だが、戦いは苦戦した。《戦闘》

人間が支配するよりも遙か昔から、あまたの妖怪が住み続けている。その中に誇り高きウルフ族は、いた。

彼らは樹海に住んでいた。めったに人間は入って来ない。住むには都合の良い場所だった。

ウルフ族は、本家側と分家側でその勢力を二分していた。昔から縄張り争いが絶えず。遂に五百年前、大規模な戦闘が勃発してしまっただのである。

分家からの使いの者がやって来た。『話し合いに応じる。一人で来られたし。こちらでも分家の代表一名で向かう』  
と言う内容の手紙が届いた。

彼は、争いが嫌いだっただ。何故いがみ合わなければならぬのか。何故仲良く暮らし行けないのか。当主にもその想いをぶつけて来た。だが、彼の言葉は受け入れられる事は無かった。

ミラルドは誰にも告げず、一人で出掛けた。その後を追う影には気付かなかった。それだけ思い詰めていたのかもしれない。

指定された場所に着いた。一人の男が待っていた。

「―分家の代表の者か―」

「そうだ…約束通り一人で来た様だな。感心、感心…。ミラルド様、争いを辞めにしたいそうだな。フン、愚かな。次期当主ともあろう者が…」

言い終わると同時に、左手を上げて合図を送る。分家の者達を取り囲んだ。

「…やはり罠だったか…」

「ミラルド様、あなたの提案には応じられない。――我々は争いを辞めない。今更攻撃の手を緩めたりしない。今我々は、黒樹様の力をお借りして、最大の力を手に入れた。今が本家に攻め入る最大のチャンスだ。…貴様には、ここで死んでもらう。」

攻撃の合図を送る。ミラルドは身構える。

「ミラルド様、お怪我は有りませんか」

「…ああ…済まない。勝手な行動を取って…助かった…」

だが、戦いは苦戦した。《戦闘》

人間が支配するよりも遙か昔から、あまたの妖怪が住み続けている。その中に誇り高いウルフ族は、いた。

彼らは樹海に住んでいた。めったに人間は入って来ない。住むには都合の良い場所だった。

ウルフ族は、本家側と分家側でその勢力を二分していた。昔から縄張り争いが絶えず。遂に五百年前、大規模な戦闘が勃発してしまったのである。

分家からの使いの者がやって来た。『話し合いに応じる。一人で来られたし。こちらでも分家の代表一名で向かう』  
と言う内容の手紙が届いた。

彼は、争いが嫌いだった。何故いがみ合わなければならないのか。何故仲良く暮らし行けないのか。当主にもその想いをぶつけて来た。だが、彼の言葉は受け入れられる事は無かった。

ミラルドは誰にも告げず、一人で出掛けた。その後を追う影には気付かなかった。それだけ思い詰めていたのかもしれない。

指定された場所に着いた。一人の男が待っていた。

「――分家の代表の者か――」

「そうだ…約束通り一人で来た様だな。感心、感心…。ミラルド様、

争いを辞めにしたいそうだな。フン、愚かな。次期当主ともあろう者が……」

言い終わると同時に、左手を上げて合図を送る。分家の者達が取り囲んだ。

「……やはり罠だったか……」

「ミラルド様、あなたの提案には応じられない。――我々は争いを辞めない。今更攻撃の手を緩めたりしない。今我々は、黒樹様の力をお借りして、最大の力を手に入れた。今が本家に攻め入る最大のチャンスだ。……貴様には、ここで死んでもらう。」

攻撃の合図を送る。ミラルドは身構える。

護衛隊がミラルドの周りを取り囲む様に、樹の上から降り立った「ミラルド様、お怪我は有りませんか」

「……ああ……済まない。勝手な行動を取って……助かった……」  
だが、戦いは苦戦した。

ミラルド達が戦っている最中、さなか分家の別働隊が、城に攻め込み。城壁の中でも、凄まじい攻防戦が繰り広げられていた。

当主のエルドは、男に、ミラルドを連れて来る様命じた。

――かしこまりました――

そう言つて男は、消えた。

ミラルドの前で突然閃光が走り、流輝が現れた。そしてすぐに消えた。ミラルドと共に……。

気が付くと二人は城の中に立っていた。

「どうして俺だけ連れ戻した。何故他の者達を置き去りにした！」  
齒をギリギリと鳴らしながら流輝の胸ぐらを掴む。

「……エルド様に……至急、ミラルド様をお連れする様。指示を受けましたので……」辛そうにする。

「ミラルド……こちらへ……」

「何の用ですか」

「これをお前に授ける」

エルドの首に掛かっていた黄金色に輝くペンダントを、ミラルドの

首に掛け、服の中へ仕舞う。

「…これは…」

「代々の当主が受け継いで来た物だ。これを持つ者こそがウルフ族の当主である証し。今からお前が当主だ」

「何故です、僕は当主などには、成りたく無い！」

首からペンダントを外そうとしたその時、多くの敵が部屋の中へと雪崩れ込んで来た。

「こんな所までやって来たか…」

三人は応戦しながら外へ出る。死角から敵が襲い掛かって来た、「危ない」と言つてミラルドを押し倒す。間一髪、間に合った。

「美鈴。何故こんな所に。ここには来るなと言つて置いただろう」

「ごめんなさい。でも、胸騒ぎがしたの。貴方の事が心配になつて…」

兎に角逃げようと、手を取り合つて、走り出した。

流輝も、後に続こうとしたが、敵が立ち塞がる。

ミラルドは美鈴を庇いながら応戦するが、敵の数が多過ぎる。

鋭い爪が迫って来る。

―避けきれない―そう思った時に、敵との間に誰かが滑り込む。四本の鋭い爪が、全てその人の軀の中に飲み込まれて行く。流輝とエルドが合流する。

「遅かったか…」

流輝は、奥歯を噛み

締め、三人を少し離れた所に空間移動させる。敵は、いない。

―美鈴―何故俺を庇つて…

「…ミラルド…あなたが無事で…良かった…あなたは…生きて…生きぬいて…」

「―美鈴―美鈴―」

ミラルドは美鈴を抱きしめ、自分の持てる全ての力を振り絞り、手当てを始めたが、愛する人を失ったミラルドの妖力は見ると見る無くなってしまった。ミラルドは、触れたら壊れてしまいそうだった。心の中を引き裂かれる様だ。こんな思いをするのなら、もう誰も

愛さない。

……みず……

そこへ敵が現れた。エルドが懸命に戦っている。

流輝はミラルドを守るので、必死だった。

もうこれまでかと思った時。

「流輝よ、お前はミラルドを守れ」と言ったエルドによって、谷底へと突き落とされてしまった。流輝には力を発揮する暇も、妖力も無かった。

激流の中に放り出された流輝は必死にミラルドの元へ辿り着いた。

そのまま二人は流される。

遠くの方で音がする。どんどん近ずいて来る。…この音は滝？その瞬間。物凄い勢いで、空中に投げ出されていた。

流輝の力も限界だったが、最後の力を振り絞って光を放つ。何とか陸上に降り立つ事が出来たが、二人共そのまま気を失ってしまった。往くにか経って目覚めた時には、ミラルドは子供の姿になっていた。

それから、時は流れ、五百年後…。

く 出逢い く (後書き)

まだ、本文に入ってません。

これから、ラブ度が上がってきます！よろしくお願いします。

## 診療所（前書き）

いよいよ、本文スタートです！

## 診療所

―お姉ちゃん！お姉ちゃん　大丈夫？　大変だ…。流輝　早く来て。どうされましたか　ラル様：あつ、すぐに　お運び致しましょう。―

―駄目です。ミラルド様。力をお使いになつては…。分かつているのですか、今の貴方は、ご自分の命を削つて、力を引き出しているのですよ。医学で治せる物は、医学で治して下さい。決して、力をお使いにならないで下さい。お願いですから…  
…解つた…―

「…ん…」

ゆつくりと、瞼を開く。ぼんやりと、白い天井が見える。

「気が付いたね、大丈夫？」

男の声がした。

「こ・こ・は？」

力無い声で尋ねた。

「ここは、公園のすぐ近くに有る診療所だよ。覚えてる？君は公園に倒れていたんだ。

今は、熱も下がって、安定しているけど、脱水症状があるからね、まだ安心出来ないな」

あ…そうだ「私…昨日から熱っぽくて…それで公園通つてコンビニに、薬買いに行こうと思って、そのまま…」気が遠くなつて…

「ここに来てくれれば良かったのに。一応　病院なんだから」

そんな事言つたつて。三年ぐらい前に、気が付いたら建つてた、オンボロ小屋が診療所だなんて、…知つても来たくないじゃない。

「私は、この手伝いに来ているミラルドと言つ者です。一応医者だよ。君、名前は？」

男は、優しく微笑みを浮かべてそう言つた。

「私は、公園の向こう側に住んでいる。杉本瑞希と言います。」  
そう言っただけで、自分を治療してくれた男に焦点を合わせた。

「あつ…貴方は…」

「えっ 私何か？」

「いつ、いえ、何でも…」

俯いて、はつとする。

「あつ…今何時ですか？って云うか。何日の何時？私 どれくらい寝てました？あーどうしよう。学校に連絡してなーいっ」ガバツと起き上がり、慌ててそう言った。途端に頭がクラクラして、倒れ込んだ。

「あつ、駄目ですよ。まだ熱が有るんですから。起き上がっては、駄目です。」

「えつと、今日は23日の もう夕方だね」

「えーっ。あつ、ケータイ 取って貰えますか。先生に連絡しなきゃ」

「ああ それなら大丈夫ですよ。君の携帯、何度も鳴っていたから失礼かとは思っただけだ…。出てみたら、高校の教師だって云うから。事情を説明しておいたよ。夕方には、見えられるはずだけだ…」

そう言い終わらない内に、インターホンが鳴った。暫くして、男が入って来た。「杉本、大丈夫か」  
ベッドに駆け寄る。

「先生、連絡しないで済みません」

「杉本は一人暮らしなんだから、気を付けないと駄目だろ」

「えつと…担任の方ですか？私は、医者のみらろ・クラウドと申します。…先程はどうも…」

「あつ、電話では失礼してしまって本当に申し訳ありませんでした。私、桜ヶ丘高校で教師をしております飯田と云います。この度は杉本が大変お世話になり、有りがとうございます。」電話での詫びもあつてか、深々と頭を下げる。

「家の者がたまたま通り掛かって。…大事に至らなくて良かったです。熱はまだ38度代ですが、安定しておりますし、…2・3日は入院して頂きますが…」

「入院ですか？」

異口同音に聞き返す。

「ええ。だつて一人暮らしなんですよ。看病してくれる人は居ないのでしょう？それなら、ここに居た方が安心です。私は今日中には新都市の方に帰るのですが、後はこの流輝に引き継ぎますから大丈夫ですよ。」

と、流輝を紹介した。

「私がこの診療所の医師で、流輝と申します。後は私が引き受けますので、ご安心されて下さい」

優しい笑顔で言った。

「杉本の事宜しくお願いします。何か有りましたら、こちらまでご連絡下さい。」

飯田は、名刺を手渡す。

「じゃあ杉本。身体しっかり治せよ。先生、後宜しくお願いします。」

と言つて帰つて行つた。

「えっと、杉本さん？一人暮らしって言つてたけど、家族の方に連絡した方が良いでしょう。」

「いいえ、良いんです。父は、私が幼い頃に病気で亡くなって、母は仕事で海外へ…。だから…」

「でも、それじゃ心配だね、一人だと…。そうだ、元気になつても遊びにおいでよ。なつ流輝」

「はい。もちろんでございます。ラル様も きっと、お喜びになります。」

ミラルドが流輝を睨んだ。

「ラル？」

「最初に貴方を見つけた子供ですよ。」

「ああ、そう云えば。あの時 子供の声が聞こえて、深いブルーの瞳が見えて、とても綺麗だなんて思っ。…それから暖かい光に包まれて…」

二人は同時にドキツとする。

「覚えて…いるのですか？」

「いいえ。意識がはつきりしていなかったので、所々、断片的なんです。…そのラル君は居ないんですか？お礼を言いたいんですが…」

「…ラルは…。明日の朝帰って来ると思います。今日は、友人の家に泊まって来るそうで…」

「そうですか？解りました。明日は、会えるんですね。…楽しみだな。」

「…ラルに会うのが楽しみなんですか？」

「はい。はつきり見てないけど。とても可愛いらしかったから…又会いたいと思っ…」

「そうですね。ラルも凄く心配しましたよ。でも約束があったので遊びに行っ。…」

「子供なんだもの仕方無いですよ」

「さあ、もう眠った方が良く」そう言いながら布団を掛ける。「綺麗なペンダントですね」

「ああ、これですか？」服の下から取り出したペンダントには、不思議な模様が描かれてガラスの様に透明だった。

「水晶ですか？」

「えっ…えつと、ただの硝子ですよ」

「とても綺麗」

「…御守りなんだ…」

「彼女からのプレゼントですか？」

「違っよ。そんな人は居ないさ。居たら、こんな所に手伝いになんて来ないよ」

「それもそうですね」

二人は同時に笑った。

瑞希は少しホツとする。

「今日は本当に有り難うございました」

「良いんだよ、そんな事。…こっちは仕事なんだし」

「そう…ですね…」

瑞希は目を伏せた。

お休みの挨拶をしてミラルドは病室を出て行く。

瑞希は目を閉じた。なんだか不思議…。ずっと会いたいと思っていた。二年前に公園で見かけて、それから毎日の様に夜の公園に出掛けて。ぼんやりと座って…。

会えないかなって思ってた。…夢みたい。

でも明日には、もう会え無いんだ…。もっと話し…すれば 良かった…。

翌朝。太陽の光で目を覚ました瑞希の、ベッドの脇に、男の子が立っていた。

「おはよう。良く眠れた？」

「おはよう。…ラル君？」

「うん」

「昨日は、私の事助けてくれて有り難う。」

「助けたのは、お兄ちゃんだよ」

「でも…私を見つけて、流輝さんと呼んでくれたでしょう？」

「…うん…」

「だから、有り難う。」

「うん」今度は嬉しそうに返事をした。

「あのね。ご飯食べられそう？あつ、その前に熱、計ってね。それから血圧計つと…はい、ここに腕通してね。」

計測器のボタンを押す。

「凄いね。難しい事出来るんだね。」

「うん。僕は、流輝の助手なんだよ！何でも出来るよ。」  
と、せっせと動き廻っている。

本当に可愛いな…。でも。この頭上の耳と、このふさふさしたシッポは何？

シッポを掴んでみる。

ひゃつと飛び上がり、手にした物を取り落とす。

ガバツと振り返り「なっ…なっ…何を…っ」

ラルは顔を真っ赤にする。

「あっ…ごめんなさい。えっと、このシッポと耳は何かな」と思っ  
て…」

「…えっと…コスプレ…」

「コスプレ？」

「…そうコスプレ。気に入ってるんだから、絶対に取らないの。触  
っちゃ駄目！！」

凄いいけんまく…。

「ごっ…ごめんなさい。」

「熱、計った？」

「はい…」

体温計を差し出す。37度8分。うん、まだ下がらないな…。脱  
水症状は改善されている様だけど…。「流輝に食事を持って来させ  
るから、待ってて」

そう言っただけで病室を後にする。

あゝあ。怒らせちゃった…。でも、そんなに怒る事かな…。機嫌直  
してくれないかな…。お兄ちゃんて言っただけ…兄弟かな…。う  
ん、解らない事だらけ…。

流輝が入って来た。

「お食事をお持ち致しました。」

「まだ、粥でございますが、デザートにフルーツヨーグルトをお付  
け致しました。」

「わっ。有り難うございます」

「好きなのですか？」

「はい」

「あの…ラル君、機嫌悪かったですか？」

「ラル様でございますか？…いえ、いつもと変わりありませんが、どうかされたのですか？」

「えっと、私シッポを掴んじやったんです。そしたら、凄く怒らせちゃったみたいで…」

流輝は、啞然と口を開いたまま固まっていた。

「あの、流輝さん？」

はつと我に帰る。

「シッポを掴まれたのですか？」

「…はい」

「はあ…そうですか…。」

「…大丈夫です。怒ってはおりませんでしたから…あの、用事が出来ましたので、失礼致します。」

「…はあ…」

流輝は足早に病室を出て行った。

ラルは、ソファ―に寝そべっている。

「ラル様…大丈夫ですか？」

「何が？」

「その…シッポを掴まれたと聞きましたので…」  
「ちらりと後ろを向く。」

「ああ…。いきなり、ガシッて掴まれて、マジで焦った。力が抜けて、へたり込む所だった。」

「何ともありませんか？」

「うん平気。力も入る様になったし」と、シッポを振ってみせる。  
「気を付けて下さい。シッポを掴まれ続けたら、眠ってしまわれるのですから」

コクリと頷きながら。

「いつもは帽子かぶって、シッポも服の下に隠しておくんだけど。」

失態だった。以後気を付けるよ。」

「…その…。シッポの事。聞かれたのですか?」

「ああ」

「どう応えたのですか?」

「コスプレって言った」

「なるほど。…今の時代は便利ですね」

「…そうだな…。でも、ボロが出ない様に用心しないとな」  
「はい」

病状はなかなか改善されず入院して一週間が過ぎ様としていた。「なかなか熱下がらないね」「うん、37度台を　うろちよると…。食欲は有るんだけど、どうしてかしらね。」

ラルは少し考えて。

「知り合いが、大学病院に勤務しているから、血液検査して貰おうか」

「そうでございますね。細菌がいたら大変でございますし」

「えっ。血液中に細菌って。まずいんじゃない?」

「偶にあるんだ。心配する事は　無いよ」

流輝はラルに睨まれて、小さくなっている。

「もっ、申し訳有りません。動揺させる様な事を口にしてしまいました」

深々と頭を下げる。

「いえ。そんなにかしこまらないで下さい。それにしても、ラル君、お医者様みたいね」瑞希に言われ、二人はびくつとする。

「えっと…。昔から…流輝やミラルドと一緒に居たから色々覚えてたんだよ」

アハハハ。よし、良いごまかしだ。小さくガッツポーズ。

「昔からって。ラル君まだ6歳ぐらいでしょう?」

「えっ。そうそう。6歳ぐらいだよ」

冷や汗がどつと出る。

「そう云えば、ミラルドさんて 何処の病院に勤務してるんですか？」

「えっ…。ミラルドの病院？」

瑞希は頷く。

「うーんとね。…大学病院の…研究員、…してるんだよ」  
汗を拭う。

「今度はいつ来られるのかな…」

「えっ…えっ…と…。あんまり休めないって言ってたから…。1ヶ月後ぐらいじゃないかな？」

瑞希は「そう」と言って肩を落とした。

何でミラルドの事ばかり聞くんだよ！！

「瑞希様は、何故ミラルド様の事ばかりお尋ねになるのですか？」  
流輝に、不意に聞かれ答えに詰まる。

「…それは…」好きだからに決まってるじゃない。

「…えっと…。素敵な人だな」と思っで…」  
軀が熱くなる。

赤い顔をした瑞希を見て、流輝ははっとしてラルを見た。

ラルの顔も火が吹き出さんばかりに真っ赤だ。

もしや、これは両想い？これで…これでやっとミラルド様も幸福になられる。

あゝもう、感無量でございます。

一人でやり切った感を出している流輝をギロリと睨み、その手を掴んで廊下に引つ張って行く。「流輝！何だその顔！その生暖かい顔、辞めろ！！」

「何故ですか？瑞希様はミラルド様に好意を持っておいでです。受け入れられても良いのでは、奥様も亡くなられて五百年経ちますし、もう新しい恋をされても良いのでは…」

「うるさい黙れ。俺はもう誰も愛さないと誓ったんだ。この手の話は二度と口にするな。」

何かに耐える様に拳を握り締め、唇も噛み締めて、悲し気に表情を歪ませた。

そのまま階段を駆け降りて行く。

ラル様はあの事件以来、心を閉ざしてしまわれた。

私では、そのお心を溶かして差し上げる事は出来ない。やはり異性の方でなければ…。

ラル様の時は、五百年前のあの日に止まったままなのかもしれない。

あれから何度か、瑞希の担任が友人を連れて、お見舞いに来ていた。

「杉本、まだ良くないのか」今日は一人だ。

「はい。熱がなかなか下がらなくて。今、血液を大学病院で調べて貰っている所です。」

「そうか。」

「あの…先生。ずっと気になっている事が有るんですけど…」

「何だ？」

「一番始めに来た時に、ミラルドさんにももの凄く謝っていた様な気がするんですけど…。どうして？電話で何かあったんですか？」

担任は「ああ。あの事か」と頭をかきながら。

「あの日、杉本にいくら電話しても連絡が取れないし。昼休みに家にも行ってみただけど誰も居なくて。もしかして、誘拐かと思っていた所に、男が電話に出てさ。もの凄く疑った訳だ。その…。変質者か…。」

「それであんなに腰が低かったんだ…。」

「ああ。先生には、本当に失礼な事を言ってしまった。申し訳無かったと思っている。」

「心配かけて済みませんでした。」

「あつ忘れる所だった。杉本、単位が足りない分は、夏休みに補習するからな。そんじゃ。早く治せよ。」

「えゝ、そんなゝ」と嘆く瑞希を残し、帰って行った。

ミラルドの同期に血液の分析を依頼し、それに合った抗生剤を調合し、投与した。瑞希は、あっという間に良くなった。三日後。

「流輝さん、ラル君。色々お世話になりました。」

瑞希は深々と頭を下げた。

「そうだ。ラル君、ウチに遊びにおいでよ。急に一人になると寂しいもん。明日土曜日だし、おいでよ。美味しい物 用意しておくから…。ねっ。」

「それは良いですね。是非そうされては如何ですか？」

「えっ…」

あゝ。やっぱり生暖かい目で見られてる。…何かム力つく。

「うっ…。うん…」

ラルは、横目で流輝を見ながら、そう返事をした。

ミラルドは、なかなか寝付けなかった。緊張しているのか。何故？…。

俺は、あの時誓ったんだ。もう誰も愛さないと…。だから…。拳を握る。

瑞希を初めて見たのは二年前。一目で好きだと思ってしまった。何故だか分からないけど…。惹かれてしまった。

毎晩公園のベンチに腰掛けて、物思いに更けるその横顔に。月を見上げるその瞳に…。

近づきたいと思っていた。近づいては、いけないと思っていた。言葉を交わしたら引き返せない。そう思っていた。その思いは、正しかった。

美鈴。俺はどうすれば良い？どうしたら良い？

美鈴、お前は俺の記憶からも 居なくなってしまった。あんなに愛していたのに…。

…どうして…。俺は…。両手で顔を覆う。

「俺は誰も愛さない。俺は誰も愛さない。俺は誰も…。」

呪文の様に繰り返される言葉が聞こえた。

流輝は 悲し気に 俯いた。

## 診療所（後書き）

もう既に、両想いじゃんと思っているかも…ですが。  
生暖かい目で見守って下さい！

## 訪問（前書き）

人物紹介します。

ミラルド・クラウド

ウルフ族当主

身長・178？ スレンダー

髪・銀色。肩に掛かる長さ

瞳・ブルー

性格・優しくて争いが嫌い。

ラル・クラウド

ミラルドの子供の姿。

身長・126？

髪・茶色。短かめ。

瞳・深いブルー。

好物・ハンバーグ。

服装・いつも Yシャツ ジーンズ。大人になる時に首が締まる為。

## 訪問

ここは三十年程前、都市開発事業で開拓された比較的新しい街で。銀行員だった瑞希の祖父が、妻と幼い娘と一緒に越して来た。

ありとあらゆる施設が整然と配置され、かなり住み良い街になっている。

瑞希の母は 結婚して一旦はこの土地を離れた。が、夫の死をきっかけに 娘と一緒に戻って来たのだ。

実家に戻って来る様に声を掛けてくれた祖父母も、瑞希が中学の頃に病気で相次いで亡くなった。今は、母と娘の二人で住んでいる。

ピンポーン。インターホンが鳴る。

「はい」瑞希は、勢い良く扉を開けた。

そこには、ブルーの瞳を大きくしたラルが立っていた。

「いらっしやい。ラル君。待ってたよ！」

瑞希は、微笑みながらそう言った。

「こんにちは。遅くなってゴメン…。もっと早く来ようと思ったんだけど…」

両手をもじもじさせる。昨夜寝付けなかったラルは、寝過ごしてしまったのだった。

「良いのよ。来てくれたんだもの。さあ上がって！」

「うん。身体の調子はどう？だるい感じとか、熱っぽいとか無い？」

「薬ちゃんと飲んでる？」

「ふふっ…。大丈夫よ。薬もちゃんと飲んでるわ。心配性ね。」

「そっか、なら良いんだけど」

ラルは ほっと息をつく。

「さあ入って」と、リビングに通された。甘い香りが漂ってくる。瑞希は「ソファア」に座って待ってて」と キッチンへ入って行く。

ラルが珍しそうに部屋中をぐるりと見回していると。

「古い家でしょう」と瑞希がトレイを手に戻って来た。

焼き立ての菓子とカップが乗っている。

「クッキーとマドレーヌ。焼いてみたんだけど、お口に合うかな。

食べてみて！」

とラルの前に皿を置く。

「はいどうぞ」の声に子供らしく「頂きます」と元気に言って、クッキーを一枚。口の中に頬張る。

「ん！美味しーい。」

お世辞ではなく、本当に美味しい。

「良かった。喜んでもらえて。私　お菓子作るの　好きなの。」  
につこりと微笑む。

ココアも飲んでみる。甘くてほろ苦い感じがする。コーヒーの香り？不思議な顔でカップの中を覗き込む。

その顔を見て瑞希は。

「ふふふっ…。それココアじゃ無いのよ！カフェモカって言うの。  
マイブームなのよ」

「美味しいよとっても。この味好き！」

「そう？良かった。気に入ってもらえて」

「瑞希…。一人で住んでるんだよね。淋しくない？僕なら淋しいな」

「そうね。淋しくないって言ったら嘘になるけど。母は、私を育てる為に一生懸命働いてくれているから…。少しは我慢しなきゃね」と笑った。

「ラル君のお父さんと、お母さんは？」

「うんとね。お母さんは僕を産んで産後の日だちが悪くて、すぐに死んじゃって。お父さんもずっと前に死んじゃった。」

あっけらかんと答える。

産後の日だちって…。

「そうなの…。ごめんね。辛い事聞いて。ラル君も淋しい思いをしているんだね。」

「うん。流輝が居てくれるから、淋しいって思った事なんて無いよ。」

「そう…。流輝さんの事頼りにしてるんだね。お父さんみたいな存在かな？」

「そうだね…。僕の右腕って所かな？」

「みつ…。右腕？」

「うんそう。流輝の作る料理って凄く美味しいんだよ！料理好きの瑞希と話しが合うかもね。」と笑っている。

「そつ、そうね。…ところで、流輝さんとラル君ってどういう関係なの？」

「えつ……………」

不意に聞かれ答えに詰まる。

「うんと…。えつと…。それは…。僕のお父さんの秘書だった人で、今は僕に付いていてくれてる。…父が亡くなる時に俺の事を頼むって言ったらしくて…。」

大人っぽい口調で話す。

ラル君って不思議な子。大人っぽい顔をしたり、子供っぽい事言ったり…。

「そう…。秘書なんだ…。」秘書付きの6歳児って…。

「ラル君って6歳だよ。幼稚園とか行かないの？」

「うん。楽しくないから行かない」

「でも幼稚園行ったらお友達、沢山出来るよ！」

「うゝん、だって話が合わないし…。ウザイじゃん。先生とか…。」

「

「そつ…そう」

やっぱ子供っぽく無い。

「それにさ…」大人っぽい顔。

…生きる時間が違うから。

「友達になっても」人間の方が先に死んじゃうじゃん。

瑞希も俺より先に、いなくなるんだ…。と、俯いて悲し気に微笑ん

だ。

「友達になつても…何？」…何でもない…。」

「そうだ。晩ご飯食べて行かない？何が良いかな？」

「うん。どうしようかな…。ご馳走になろうかな…。ハンバーグ食べたい。」

赤い顔をして、俯きながらそう言った。

「よし！ハンバーグね。材料も揃ってるし。大丈夫！作れるよ！…それじゃ、手伝ってくれる？」

「うん良いよ！」

瑞希は「ちよつと待っててね」と言つて二階に上がって行き、エプロンを手に戻つて来た。

瑞希は赤地に白いドット柄。ラル君はこれつと、白のフリルがたっぷり使つてある。レースのエプロンを手にしている。

えっ。こつこれ着けるの？と二、三步後ずさる。

瑞希に身体を掴まれて、無理やり着せられた…。

恥ずかしい…のに。あろうことか、それを可愛いと写真に収めている。ああ。何て事だ…。

気を取り直してハンバーグ作り。瑞希の指示でラルは、テキパキ動く。

「ラル君凄い。いつも手伝ってるの？」

「うん。いつもは何もしないけど…。やろうと思えば出来るよ！」と言つ。

「そうなの…。じゃあどうしてお手伝いしないの？」

「流輝が嫌がるから…。ラル様は何もなさらないで下さい！」つて言つて、全部自分一人で何でもやっちゃうんだよ！」と言つ。

「へえ…そうなんだ。そう云えば、ミラルドさんとラル君って兄弟？」

「うん違うよ。従兄弟なんだ。えつとね、ハーフって言つなの？」

「ふんそうなんだ。ミラルドさんとは何でも話すの？」

「うん。ミラルドの事なら何でも知ってるし、僕の事もミラルドは

何でも知ってる。」

「そうなの…仲良しなんだね。じゃあラル君にとってミラルドさんは、お兄さんみたいなものかな？」

「…ミラルドは僕にとつて…分身…かな」寂しい顔で言う。

「分身？どう言う意味？」

「…なんでも無い。…そうだね。兄ちゃんかな…。まっ、何でも良いじゃん。早く食べようよ！」

「あつ。そうだね。食べようか。」

二人で食器を並べたり、食事の準備を済ませ席に着く。

「わあ、美味しそう。頂きま〜す」一口頬張る。

「う〜ん。美味しい。瑞希って天才だね。」と言って 黙々と食べる。

「天才は大袈裟だけど…嬉しいわ」と言って瑞希も食べた。食事を終えた後、片づけを済ませソファで くつろぐ。

「何か飲む？」「う〜んと。紅茶有る？」

「インスタントなら有るよ。それで良い？」

「うん。じゃあそれ、お願い。」「分かった。待っててね」

「お待たせ」と言いながらカップを手渡す。

「ありがとう」と言って一口飲む。

「ごめんね。インスタントしかなくて。今度 流輝さんに ちゃんとした茶葉の入れかた 教えて貰うね。」

「うん。…これは、これで美味しいよ。」

「…なら…良いけど…」と瑞希は申し訳無さそうに言った。

テレビでも点けようか？と言ってスイッチを入れる。二十年前から三十年前に流行った歌番組が放送されている。

「うわ〜懐かしい。」と、ラルが感嘆の声を上げる。

「えっ…懐かしいって…」流れる曲 全てを一緒にになって歌っている。

なっ何でこんなに歌えるの？私だって知らないのに…。

「ねえ、ラル君どうしてそんなに古い曲を知ってるの？」

「えっ」ラルははつとして、しまった―と思う。どっ…どうしよう…。  
「えつとね…。うーんと…。あつ、そうそう　流輝が良く歌ってたから。覚えちゃった。」

「ああ。そうなんだ」。凄いね。私知らない曲ばかりよ！」と納得してくれた。

はー。助かった。ほつとする。

「僕、もうそろそろ帰るね」

「じゃあ送って行きましょうか」

「大丈夫だよ。一人で帰れる。それじゃあご馳走さまでした。ちゃんと薬　飲んで、暖かくして寝るんだよ！」

「あはははっ。心配性ね。ちゃんと薬飲んで寝るから。じゃあ気を付けて帰るのよ。流輝さんに宜しくね。」

「うん。じゃあバイバイ。」と手を振って帰って行った。

やっぱりラル君って変わった子一緒に居て全然飽きないな…。お風呂に入って、さっさと寝よう。じゃないと怒られちゃう。

ラルの怒った顔を想像してみる。うふふ…。

「怒った顔も　可愛いんだろうな」と言っただけの中へ入って行った。

ラルは　公園の中を通って診療所へと向かって歩く。

今日は楽しかったな。瑞希って本当に料理上手だな。良いお嫁さんになれるかも…。

…お嫁さんか…。

瑞希が誰かの物になる…。あの笑顔が俺じゃない他の誰かに向けられる…。そんな事になったら俺はどうするだろう。黙って見ていられるのか…。俺は…耐えられるのか…。

足取りが重くなる。胸が苦しい。ブランコに腰掛けぼんやりと考える。

答えなんて見つからない。出口の無いトンネルの中を　さ迷っ

る様だ。

物思いに更けるその横顔は、とても子供とは思えない 大人っぽさが伺える。

首からぶら下げているペンダントを取り出し、月にかざしてみる。無色透明のほずが、濃いピンク色になっている。

このペンダントはウルフ族当主だけが持つ事が出来る紋章と云われる物で。愛情で満たされると真紅に染まる。

ミラルドの父親が着けていた時には、黄金色に輝いていた。複雑な思いで 紋章を見つめる。

「ラル様 もうお帰りでございますか。瑞希様のお宅は、いかがでしたか？」

流輝が近ずいて来る。ラルの手に握られている物を目にし、

「―それは―」そう言って口をつぐんだ。

「なあ 流輝…」

「はい。何でございますか？」

「この紋章。親父が着けていた時。それを受け継いだ時も、金色だったな…。どうしてだ。…俺は 紋章に認められて無いと言う事なのか…。」

「それは…。」一時考えてから口を開いた。

「エルド様にお尋ねした事は ございませんでしたが。…そうですね…。迷いなく誰かを愛する心。仲間を思う心。そして自分を愛する心。全てが揃った時に 黄金色に輝くのではないかと考えます。」

「…そうかも知れないな…。」

俺は、いつも迷ってばかりだ。自分の事も 愛してはいない気がする。

ただ無駄に生きているだけ…。

ラルは、淋しい笑みを浮かべた。

## 訪問（後書き）

大学ノートに 90ページ程綴っている物を 携帯に打ち込んでいます。

文明の力をなかなか使いこなせず…。先が 長いデス！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8588y/>

---

ウルフ族の紋章～出逢い～

2011年11月30日10時51分発行